様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６３５０３６４

研究課題名（和文）ルネサンスの批判的学問論の研究――ペトラルカ，サルターティ，ベイコンを中心に

研究課題名（英文）Study on Critical Theories of Science in the Renaissance, with Case Studies on Petrarca, Salutati and Francis Bacon

研究代表者
東　慎一郎（Higashi, Shinichiro）

東海大学・現代教養センター・准教授

研究者番号：１０３６６０６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究においては，ルネサンスの学問論を研究した．ヨーロッパに大学制度や古代の知が広まりつつあった時代において，F．ペトラルカ，C．サルターティ，そしてF．ベイコンは，人文主義の流れを形成しつつ，知による知の批判を展開した．とくにペトラルカは，従来，宗教的視点からの哲学批判を展開したことで知られてきたが，実際は哲学の歴史と現状についてよく認識しており，当時まだ初歩的な紹介しかなされていなかった懐疑主義的議論に注目しつつ，学問に関する独自の理論的立場を築いていたことが明らかになった．

研究成果の学術的意義や社会的意義
　一般に，学問論の歴史は未開拓の領域であるが，今日の科学技術文明の状況を踏まえるならば極めて重要な領域である．知的探究の本質，およびそこに内在する問題についての理解する上で，ヨーロッパ学問論の長い歴史について認識することが役立つだろう．ルネサンス期の学問論に登場する，認識論や懐疑論，諸学の存在論的検討などの思考を発掘し，その主張の現代的射程を明らかにすることで，今日の学問論や科学論をより実り多いものにできるだろう．

研究成果の概要（英文）：　The aim of our research project was to shed light on the theories of knowledge and science in the Renaissance. F. Petrarca, C. Salutati and F. Bacon all formulated original theories of science in a period when the university system was growing rapidly and Ancient knowledge was gaining adherents as a new outlook on man and the world. We discovered that, despite their differences, the three tackled fundamental issues in the theory of science, such as the nature and limits of knowledge as well as its meaning for man. We focused in particular on Petrarca; the Italian humanist, despite current views depicting him as a religious thinker, had in fact a broad knowledge of philosophy and its contemporary trends. New insights have been obtained on his originality as a sceptical thinker in comparison with predecessors such as Cicero or John of Salisbury.

研究分野：科学史

キーワード：学問の有用性　懐疑主義　キケロ　『学問の進歩』　『法学と医学の高貴さ』　『無知について』

１．研究開始当初の背景

本研究では，これまでヨーロッパ科学史において正面から取り扱われなかった問題として，学問論の歴史に取り組んだ．

科学史では，例えば初期近代の科学革命について研究が積み重ねられ，自然観や自然理論，あるいは自然の研究方法の大きな転換について，その複雑な細部まで含めて，克明に跡づけられている．また，中世，そしてルネサンス，それぞれの時代においても，近代以降の科学とは大きく異なるものの，やはり制度化され方法的に追求された自然研究が行われてきたことが明らかになっている．しかし，中世から 17 世紀までの重要な時代における，科学や学問全般の位置づけをめぐる変遷となると，いまだに十分研究されていないフィールドのままである．

その先駆となるような研究はたしかに行われていた．例えば，ルネサンスから初期近代にかけての方法（*methodus*）の捉え方の歴史である．また，ルネサンスにおける数学的諸学の位置づけをめぐる研究も，従来行われてきた．本研究の研究代表者は，16 世紀におけるアリストテレス主義的哲学者に絞って，そうした研究を遂行した．しかしこうした研究はいずれも研究対象が学問論そのものよりも範囲が限定されていた．

こうした背景から，本研究では学問の人間論的・社会的位置づけと意義をめぐる総合的視点からの議論を，歴史研究の対象として取り上げた．ただ，その範囲の広さのため，ルネサンス人文主義の３人の重要思想家に焦点を絞ることにした．

上述の思想家たちは，今日的意義が大きいという共通点がある．科学，および科学と技術が融合した科学技術が，かつてないほど大規模化し，細分化している今日，人類はこうした科学技術が深く関係する弊害とも向き合わざるを得なくなっている．資源枯渇や環境問題，生命倫理の問題,科学技術と軍事研究の問題などはその代表的なものである.こうした時代において，科学技術の本性と意義をめぐって，総合的な再考察が必要になっているが，その際，私たちは学問論の過去，およびそこでのさまざまな論点や議論の蓄積から，数々の洞察やヒントを得ることができるだろう．

２．研究の目的

上述のように，本研究計画では，ヨーロッパ科学史においてこれまで未開拓の領域であった学問論史を，数名の重要人物を取り上げることによって切り開いてゆく手がかりを得ることであった．ヨーロッパでは，12 世紀以降，大学の制度化が進み，17 世紀の科学と哲学の革命の時代にいたるまで，知の伝達と発展のための中心的制度として発展を続ける．

その中で，そうした制度化された知のあり方そのもの，あるいはその中でも法学，医学，あるいは自然哲学などの個別分野に関して，大学の知とは異なった方向性を模索する動きも発展した．人文主義，および人文主義の視点からなされる学問論である．こうしたルネサンス学問論は，知に対するその先鋭な批判意識，そしてその普遍的な射程のため，思想史的にも，また現代的にも，大変興味深い議論である．本研究では，初期人文主義のフランチェスコ・ペトラルカ，コルッチオ・サルターティ，そして後期ルネサンスと初期近代の架け橋，フランシス・ベイコンを重要人物として取り上げ，知全般に対する，あるいは知の個別領域に対する，彼らの立場と考察において，従来の研究で未開拓の問題を取り上げ，研究することを目的とした．

３．研究の方法

本研究では，上述の３人の人文主義者の諸著作のうち，学問論的主題を取り上げたその諸著作に焦点を絞り，それらをめぐる研究状況を現代学問論の視点から見直し，それらの研究の欠を補い理解を修正することを目指した.その際,こうした諸著作をめぐる思想史的,哲学史的,科学史的，そして重要と判断される場合において知の制度史的な状況に注目した．これは科学史研究において頻繁に用いられる方法論である．ペトラルカ等の学問論の分析においては，こうした歴史的文脈を踏まえつつ，テキスト分析を通じて思想の論理構造を明らかにし，こうして各学問論における歴史的規定性と創造的貢献の両方を明らかにするべく研究を遂行した．このような方法を通して，歴史的背景を無視するアナクロニズムを避けながら，思想の現代的意義について検討することができるだろうと考えられた．

４．研究成果

総合的に見て，研究計画全体を通じ，ペトラルカ，サルターティ，そしてベイコンの学問論について，それぞれより現代的視点から見直すことができた．また，研究のさらなる継続により，今後もなお見直しが続くだろうという予想も得られた．

(1) 最初に，フランシス・ベイコンに関しては，従来彼が重視したとされる学問の「有用性」（『学問の進歩』，1605 年，等）が持つ多義性と豊かさについて，いっそうよく理解することができた．従来の研究で，すでにベイコンにおける有用性概念の内容的豊かさについて認識されていた.何らかの社会的･物質的実益だけでベイコンの有用性概念を評価することはできない．ベイコン学問論においては精神的有用性まで視野に入っている．他方，そのような有用性の思想が目指す最終的な善に関しては，従来の研究では単に「人類の福利」と想定され，それ以上の考察はなされていなかったが，実際には，ベイコンが，科学者における倫理的行為の問題まで視野に入れていた可能性があることが明らかになった．

(2) サルターティをめぐっては，その『法学と医学の高貴さについて』(1399 年）を主な考

察対象とした．自然の知と社会の知，歴史学的認識論，理論と実践の優位の問題など，多様な観点から評価がなされている現在の研究状況を踏まえた上で，本研究では，テキストに表れるアリストテレス主義の影響について考察し，例えばロバート・グロステスト『分析論後書注釈』の援用に見られるように，中世学問論の形跡を見出した．こうした点から，サルターティの学問論を正当に理解するに当たっては，従来よりもアリストテレス主義との関係を重視すべきだということが明らかになった．

(3) 本研究においては，ペトラルカに多くの資源を投入した．ルネサンスの人文主義的，批判的学問論の中でも，ペトラルカは独自の地位を築いており，また現代学問論的視点からの研究がもっとも手薄であるように見えたからである．その分だけ，成果も多様であった．

取り上げたテキストは，晩年の『無知について』である．ここで本格的に展開されているペトラルカの学問論は，従来，ギリシャ的世界観に対抗するキリスト教思想，あるいは学問と理性に対抗する信仰，という文脈で理解されてきた．研究では，こうした見方が大局的には正しいものの，それが同時にペトラルカの異教哲学への深い傾倒と知識を覆い隠すものであるということも認識された．研究では，ペトラルカがいかに哲学的思考，批判的学問論的思考に負っているかがさまざまな事例から明らかになった．

ペトラルカの宗教的スタンスがはっきり表れている側面として，アウグスティヌスから引き継いだ好奇心批判を挙げることができる．他方で，第６部に見られる懐疑主義的議論からは，哲学的議論の知識の深さが見てとれる．研究ではまず，ペトラルカがキケロの懐疑主義をどのように受容したかを考察した．キケロの『アカデミカ』は，ペトラルカにより「もっとも好む本」のリストに入っていたが，彼はキケロ的懐疑主義の主要な議論として，一方で独断的懐疑主義，他方で根源的懐疑主義をよく把握していたことがわかった．同時に，こうした議論を通じ，ペトラルカが哲学的手段だけで哲学の限界を明らかにしようとする議論の構造を研究し，それが認識の限界問題と呼べるような性格を有することを明らかにした．

同時に，キケロとペトラルカをつなぐリンクのひとつとして，初期のキリスト教著述家ラクタンティウスの議論も研究範囲に入れ，後者とペトラルカとの関係を考察した．ラクタンティウス『神聖教理』は，キケロの強い影響のもと書かれているが，そこに見られる懐疑主義には，キケロのテキストに比べそれほど大きな変容は見られない．他法でペトラルカは，ラクタンティウスを引用するものの,その懐疑主義はより認識論的に徹底していることが明らかになった．

さらには，本研究ではペトラルカが言及するソールズベリーのジョンとその懐疑主義も取り上げた．ペトラルカがジョンをよく知っていた可能性は，すでに既成研究によって示唆されている．他方で，ペトラルカとの比較の結果，ジョンの懐疑主義は，より建設的，漸進的目的のもとでなされると評価すべきものであった．その点で，学問の根拠そのものの不確実性を強調するペトラルカの懐疑主義と同一視できないと結論づけた．

また，研究の中で，哲学において広まっていた懐疑主義的議論（外界の存在への懐疑，感覚的認識への懐疑等）との比較も，若干ながら行った．イスラーム哲学や，ビュリダン，オッカムらの思想において，認識論的懐疑主義が見られること，そしてそれがデカルトの懐疑論との一定の連続性を持っているように見えることは,近年の研究の中で明らかになっている.一見,キケロの懐疑主義とは独立に行われるこうした議論はしかし，ペトラルカと同時代に行われており，こうした議論とペトラルカとの接点の有無については，今後の研究課題として重要になるという予測が得られた．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１件）

(1) Shin Higashi, "Uncertain Foundations, Inane Pursuits: Petrarch on Science in the *On Ignorance*," *Bulletin of Center for Liberal Arts, Tokai University* 1 (2017), pp. 49-59.

〔学会発表〕（計　３件）

(1) Shin Higashi, "Renaissance Discussions on Mathematical Demonstrations: Aristotelians and Humanists", paper read at symposium: "Mathematical Discoveries and Styles of Demonstration across Cultures" (July 28, 2017), 25th International Congress of History of Science and Technology, Federal University of Rio de Janeiro, Rio de Janeiro (Brazil), 23-29 July 2017.

(2) 東慎一郎,「中世ルネサンスにおける数学論をめぐって――学問論的伝統とその現代的意義」，中世哲学会第 63 回大会，中央大学，2014 年 11 月８日．

(3) 東慎一郎,「学問論史からの視点――科学史との補完的関係」，シンポジウム「科学史とインテレクチュアル・ヒストリーの挑戦」，日本科学史学会第 61 回年会，酪農学園大学，2014 年５月 25 日．

〔図書〕（計　１件）

(1) Shin Higashi, *Penser les mathématiques au XVIe siècle* (Paris: Classiques Garnier, 2018), 489 pages, ISBN: 978-2-406-06895-2.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。